



## 井上 能裕 (47期)

●Yoshihiro Inoue

「使われなくなった脳の神経回路は刈り込まれる」と云われる。同じ事務所に四半世紀もいると、ややもすれば環境面での刺激が乏しくなりがちなので、初体験や異文化との遭遇を意識的に増やさなければと思いついた。そこで今夏、弁護士生活24年目に初めて「互助会旅行」に参加させてもらった。

行き先は成田から飛行機で約5時間半のベトナム。商都ホーチミンでまず圧倒されるのは、バイクの大群だ。バイクの世帯普及率が世界第2位というのも頷ける交通量である。信号や横断歩道も少ないため、「過保護社会日本」「野生の勘」といった単語を脳裏によぎらせつつ、神経を研ぎ澄ませて決死の覚悟で道路を横断した（脳の神経回路一部復活）。

次に脳の神経回路を刺激したのは、値札の桁の多さ。インフレの進行ということだと思われるが、20万ドン札が商店で普通に使用されている。役に立った円への換算方法は、末尾の0を2つ消して2で割るといったもの。「1000万の買い物をしちゃったよ。」という会話が日常的に成立する訳である。司法浪人中にバ

ブルが崩壊していた身としては、リベンジの一端として、帰国後このセリフを使う機会を虎視眈々と狙っている。

ベトナム戦争の史跡「クチトンネル」は、米兵との体格差を利用し、民族解放戦線側の兵士しか入れない狭さの地下坑道を蟻の巣のように縦横に巡らせ、神出鬼没のゲリラ戦で米軍を悩ませたトンネルである。実際に入ってみると、しゃがみ歩きでないと進めない閉塞感は尋常ではなく、これに籠もりながら命のやりとりをする緊張感は想像を絶するものがある。衛生面など劣悪な環境でほぼ10人に1人が病死したとの報告もあるようで、現地に立つと、いわば「土と鉄」、人間と機械との戦いという消耗戦であったことが実感される。

人類の悲劇を巡る旅を「ダークツーリズム」として紹介する本で、クチトンネルと並んで掲載されていたのが、「戦争証跡博物館」である。各国の報道カメラマンが、戦争で傷ついた兵士や一般市民を活写した戦場写真や、枯れ葉剤による被害の記録が展示されている。「〇〇の残虐行為」といった声高な糾弾調ではなく、静かに戦争の不条理やいかに弱者にしわ寄せがいくかを訴えかけるといった趣に、却って肅然とさせられ

る。枯れ葉剤を散布した米兵やその子どもにも健康被害が生じており、彼らもまた被害者であることが分かる。帰国後、ベトナムの歴史を紐解く。ベトナム戦争が冷戦の文脈における大国の代理戦争というだけでなく、日本のインドシナ占領が米国にこの地の重要性を認識させる契機となったり、開戦後は在日米軍基地が出撃地や中継地となったり、物資供給で特需にもなったりしている。日本がこの戦争と決して無関係ではないという事実を突きつけられる。

初体験の互助会旅行、当初の戦々恐々状態は早々に脱し、下は0歳から上は80代まで、家族的な一体感を感じつつ、密度の濃い時間を過ごすことができた。初対面や、普段プライベートな会話を交わす機会の少ない大先輩の先生方が気さくに接してくださったことも得がたい経験であった。

この場を借りて入念に準備いただいた互助会運営委員の先生方、担当事務局の竹内さんに厚く御礼申し上げる次第である。



ホーチミン市中にて

Hanamizuki

## 花水木

43



宮山 春城 (62期)  
●Harushiro Miyayama

### ＜わたしの重要な他者たち＞

弁護士1年目から所属している司法修習委員会で、来年から部会の責任者の任を拝することとなった。弁護士登録当初に事務所の先輩から勧められただけの理由で入った委員会だが、性に合ったのか今のところ楽しく続けられている。

毎年新しい修習生を迎え入れ、ハラハラと二回試験の報告を受けるたび、まるで学校みたいだなと思う。短い期間とはいえ、「先生」のもとで指導を受け、新しい世界に踏み出していく修習生たち。実務につく前の、最初の師と巡り会うこともあるかもしれない。

残念ながら、私にとって横浜での弁護修習はそういうものではなかったけれども、修習を終えて入所した事務所においては、幸運にも素晴らしい先輩方に恵まれた。15年以上前から、事務所内の弁護士の呼称として「～先生」を廃止し、「～さん」「～君」と呼び合う習わしになっている事務所だが、心の中では師匠と仰いでいる先生が何人もいる。

あの人だったらどんな書面を書くだろうか、依頼者にど

んな励ましの言葉を送るだろうか、最初の数年間はいつもそう考えながら仕事をしていたと思う。今はもう、それが自分の考えなのか、それともいつか先輩から教えを受けたことなのか分からないことの方が多い。

一人の人間の中には、沢山の他者の声が息づいている。細かなディテールは忘れられて、文脈すら不確かになっても、ずっと昔に言った・言われた言葉が、今の自分の生き方と結びついている。ある人曰く、「人を喜ばせることができるのも優しさ。人を悲しませないことも優しさ。」今の仕事は、その両方を叶えるものになっているだろうかと自問する。

仕事においても、広く人生においても、師匠と呼べる存在と出会えたことは、私にとって最も幸運なことのひとつだった。その人の生き方が、これから先も、狡くてサボりがちな自分を厳父慈母のように律してくれるだろう。

去年の夏、妻が女の子を出産した。初産だったこともあるのか、激しい陣痛に耐える様子は、見ているこちらの心臓も絞られるようなものだった。朝方、分娩室で立ち会った私に、「へその緒を切ってみなさい。」と初老の医師がハサミを手渡した。青黒い、

ひしゃげたゴム管のようなへその緒に、見慣れない形のハサミをあて、指先に力を入れる。ぷつりとへその緒が切れ、どろりとした膿のような液体が流れ出した。思わず顔をしかめる私など意に介することなく、産声を上げ続ける赤ん坊に医師が労うように声を掛ける。「ようやくお母さんと別々になれたね。」

私の人生の師は私の父ではない。私が娘の師になることもないだろう。正直に言って、私にとって娘よりも大事なものは、10年にわたり共に支え合ってきた妻である。当然のことながら私と妻との間に血のつながりはない。

それでも、それだからこそ、私にとっても妻にとっても、娘が生きるであろう私たちがいなくなった未来の世界において、この子が誰かの重要な他者になってくれればいいと、薄い背中を抱きかかえながら強くそう思う。 ■



初めての授乳